

■流域委員会への意見

立石 勝二

「ダム」のことで体験したことをそのままお伝えしたくおもいます。

先日、箕面ダムのほとりに「さつき」がきれいにさいていましたので車から下りて見に行きました。その後、ちょっと足をのぼしてダムの反対側の方に行ってみました。するとそこには鴨長明（だったか？）の一文を書いた立派な石碑がありました。私がそれを見ていると、（まったく人どおりはなかったのですが）ちょうどそのときリュックを背負った自分と同年輩の60歳台の男の人が通りかかりました。

私は、そのときほとんど人目につきにくいところにある手すりのついた舗装された道を歩いてきた人に「この道はどこに続くのか」と尋ねました。

その後いろいろと話していると、その人は近くに住んでいる人で「子供のころはここの川（今はダムになっている）によく釣りにきていた。大きなヤマメが釣れて楽しかった。景色もきれいだった」と話されました。

「いまは釣れないのか」と訊くと「今はまったくいなくなった。水は汚れ景色もだめになった。ダムができてからは人も寄りつかなくなった。ダムができていいことはひとつもない。百年に一度の洪水に備えるということだったがあれはウソだった」と云われました。ここまで聞いていたとき、車の中で待っていた家内がしびれを切らして呼びにきました。

「脱ダム宣言」のことは知っていましたが、地元の人からこれほどまでに「憎まれている」とはおもってもいませんでした。「ダムの恩恵をうける」はずの人から直接この話を聞き、ほんとうに「ダムはむだ」だと実感しました。